1999. 1. 7

(Japanese Academy of Learning Disabilities)

日本LD学会会報　第27号

事務局：東京学芸大学心理学研究室内　〒184-0015 東京都小金井市貫井北町4-1-1
TEL.&FAX. 0423-27-2890

不況のなかで思うＦ君のこと

東京学芸大学
松　村　茂　治

20年ほど前、小学校の教員をしている知人から担任しているクラスのなかに、気になる子がいるとの相談を受けた。今ほどＬＤのことが話題になることのなかった時代のことだが、東京学芸大学では、現会長の指導のもと、ＬＤ児への相談活動が活発に展開されていた。筆者は、直接その活動に参加していたわけではなかったが、直接・間接にＬＤについて知る機会には恵まれていた。まさに耳学問として得ていた情報から、その「気になる子」が、相談室に来ている子どもたちと似ていると思ったのである。すぐに相談室を紹介した。

相談室での指導は、彼が小学校を卒業するまで続いたと思う。来談中、姿を見かければ声をかけたし、知り合いの学生を家庭教師として紹介したこともあったが、卒業後、Ｆ君との接触は、次第に間遠になっていった。

10年ほど前、家族で出かけた遊園地で、なつかしい顔を見つけたのである。昔の面影を残しながらも、大人の風貌を身につけ始めたＦ君は、工業高校の２年生になっていた。春休みを利用して、自宅から１時間ほどのところにある遊園地で、アルバイトをしていたのだ。はじめて学芸大学へ来たのは小学校２年生のとき。緊張で、目にはチックが出ていた。すっかり成長し、自立しつつある彼の姿を目にしたのが嬉しくて、大学に戻ってからすぐに会長にこの日のことを伝えた。

片道２時間もかかる高校生活も無事終え、彼は今、コンピュータ関連の会社に勤めている。２年ほど前の電話では、彼が休むとラインが一つ止まってしまうので、休めないのだと言っていた。

Ｆ君にとって、今の職場は２つ目である。数年前、体調を崩し、通勤に時間のかかる前の会社から家の近くの今の会社に転職をしたのである。近くに職場が見つかったことも幸運だったが、もう１つ幸運なことがあった。移って間もなく、前の勤務場所がリストラにあって閉鎖されたのである。

今、そのとき以上の不景気が続いている。Ｆ君のような実直な若者が、そのいささかの弱さ故に、職を失うようなことがなければいいがと思うこの頃である。